

巨大津波でも 残った戸建て 奇跡の 床下工法



流されなかった佐々木さん宅

津波で多くの家が流され、残った家屋も甚大な被害が残る仙台市若林区の井土地区。ここに、津波にも耐えた、奇跡の家、が存在する。

海岸から八百メートルほど離れた佐々木登さん宅だ。震災当日、急いで自宅に戻り、残っていた家族を避

難させた佐々木さんは、ブレーカーを下げて、大事な荷物を運ぶ準備をしていた。そこへ、津波が迫ってきた。

「波が、口笛みたいな音をたてて鳴いてんだ。と思ったら、あっという間に五十メートルくらいまで近づいてきた。だから俺は思わず吠いたんだ、「来るなら来てみる」ってな」

家に飛び込み、階段を駆け上がると、追いついた津波が躍を濡らしたが、二階までは浸水しなかった。「ペランダの手すりよじのぼって、車や家が流されてくるのを見た。アンテナにしがみついた若い男性二人を乗せた家が、いくらから斜めになって流されてきたり……」(同前)

佐々木さんは夜になってからヘリで救助されたが、他の家と違って壁や柱に損傷が少なかったのだ。

この家の基礎は、床下の空間を土と砕石で埋め尽くし、鉄筋コンクリートで密

封してある。これは地熱を床に伝えるための工夫だが、結果的に水が入りこまなかった。また、外壁には

耐久性に優れた素材が使われ、柱も通常の約一・五倍の強度。こうした構造が津波に耐えたのだ。

一カ月半ほど親戚のもとに身を寄せていたが、高齢の母親が福らした「早く家に帰りたい」という一言もあり、佐々木さんは自宅に戻る決意をする。

「町は戦争みたいな状態だった。でも、この家は生きてた。だから瓦礫を片付けて、発電機置いて、二階に住めるようにしたんだ。六月には電気も通してもらってね。瓦礫処分の作業をしてる人たちには、周囲で一軒だけ住んでるから驚かれるんだ。でも俺は、ここで暮らすことが町の復興になればいいと思ってる」

宮城県の沿岸部、亘理郡山元町にも同様の工法で建てられた家が残っている。

「津波の後、壊滅状態の町を見て、当然うちも流されただろうと思いました」

(深沼陽一さん)

ところが数日後、親戚の住む仙台市に避難しようとしていた深沼さんに、近所の知人から連絡が入った。

「何か知らんけど、お前ん家、しっかり建ってるよ」

深沼さんが言う。

「一階こそ水浸しで瓦礫も散乱していたけど、外壁に傷がついた程度で、柱も無事。試しに床に球を置いてみても、転がらなかつた」

ライフラインが整備されなかつたため、生活拠点を移したが、「ヘリで別の場所に移すので運んで住みたいくらい」(同前)だという。